

田中允編

未刊謡曲集

続十九

古典文庫

田中 允編

未刊謡曲集

古典文庫

古典文庫第五九八冊

平成八年九月二十日印刷發行

非売品

編者 田中 允マコト

発行者 吉田 幸一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

集曲謡刊未
九十九続

發行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話〇三(三九一〇)二七一一七
振替口座〇〇一九〇一九一四五九七番

目次

凡例	七
各曲解題	一一
本文	
鴨(加茂)物狂米沢異本(加茂・六月祓)	(一一)・七九
加茂物狂喜多流改作異本	(一二)・九二
京落葉米沢異本(落葉・落葉宮・小野・小野落葉)	(一三)・一〇四
落葉明和改正本(全右参照)	(一三)・一一二
清時米沢第一異本(清時田村・現在田村)	
田村清時・澄時田村・清瀧田村?	(一六)・一一八

清時田村米沢第二異本(全右参照)	……………	(二六) …… 一二一
清時田村福王流系異本(全右参照)	……………	(二六) …… 一二四
田村清時下村異本(全右参照)	……………	(二六) …… 一二七
伍子 胥米沢異本(范蠡・西施)	……………	(一九) …… 一三〇
五 筆米沢異本(筆論)	……………	(二二) …… 一三四
五 筆福王流系異本(全右)	……………	(二二) …… 一四〇
信貴 山米沢異本(毘沙門信貴山)	……………	(二四) …… 一四八
聖德西王母米沢異本(鶴西王母・松鶴西王母・聖德)	……………	(二六) …… 一五三
盛德西王母福王流系異本(全右)	……………	(二六) …… 一五六
聖德西王母紺表紙異本(全右)	……………	(二六) …… 一五九
鶴西王母下村異本(全右参照)	……………	(二六) …… 一六二
聖德西王母田中異本(全右)	……………	(二六) …… 一六六

孫子	邈米沢異本(水蒔龍神)……………	(二八) ……一六九
孫思	邈福王流系異本(全右)……………	(二八) ……一七五
涿	漉米沢異本(貨狄・蚩尤)……………	(三三) ……一八四
涿	漉飯田異本(全右)……………	(三三) ……一八九
竹	雪米沢異本……………	(三六) ……一九三
竹の	雪觀世流版本……………	(三六) ……二〇四
竹	雪下懸版本……………	(三六) ……二二五
竹	雪喜多流現行曲……………	(三六) ……二二六
土	車米沢異本……………	(三七) ……二三四
鳴不	動米沢異本(不動)……………	(三九) ……二四三
鳴不	動福王流系異本(全右)……………	(三九) ……二四八
七	面米沢異本(身延詣)……………	(四四) ……二五七

橋立龍神米沢異本(天橋立・橋立・龍神橋立・

祝言橋立・祝言天橋立)……………(五〇)……二六五

橋 立福王流系異本(全右参照)……………(五〇)……二六九

龍神橋立下懸系異本(全右)……………(五二)……二七二

治 親米沢異本(磯屋・磯屋十郎・箆破)……………(五二)……二七五

春 近觀世流版本(全右)……………(五二)……二八九

箆 破仙台異本(全右参照)……………(五二)……三〇四

磯 屋金春流異本(全右参照)……………(五二)……三一七

治 親復曲本……………(五二)……三二九

吹 上米沢異本(和歌吹上・衣通姫)……………(六一)……三四六

吹 上仙台異本(全右)……………(六一)……三五三

枕 慈童米沢異本……………(六三)……三六〇

身 延米沢異本(身延山・七面?)……………(六五)：三六七

身 延元禄版本(全右)……………(六五)：三七二

御裳 濯米沢異本(御裳濯川・石鏡・鏡御裳濯)……………(六七)：三七七

御裳 濯川明和改正本(全右)……………(六七)：三八六

鞭 文学米沢異本(六代・文学・六代文学・局六代・文覚六代)……………(六九)：三九一

龍 頭米沢異本(龍頭大夫・稻荷・稻荷山・弘法・額稻荷)……………(七二)：四〇二

追記・訂正……………四一〇

凡例

一、本文庫の『番外謡曲角淵本』正統二冊計五十二番、『未刊謡曲集』三十一冊計一五二六番、合計一五七八番、『謡曲叢書』三冊、『新謡曲百番』、国民文庫本『謡曲全集』上下巻、国書刊行会本『宴曲十七帖附謡曲末百番』、日本名著全集本『謡曲三百五十番集』、『謡曲評釈』九冊（謡曲叢書本以下は重複曲多く、重複しない総数は約六百番）などの、図書館などで比較的閲覧し易い、まとまった諸本にみられる曲を除き、この続第十九冊では米沢本の中で異本として注意すべき曲の残り「鴨物狂」から「龍頭」までの四十六番を翻刻した。

二、翻刻はすべて原本通りを原則としたが、私意を加えた所はすべて（ ）でくくった。また各曲解題の所でも、原典を引用した所の中の私註は同様に（ ）でくくった。

三、原典には段落のない場合が多いが、編者の見識で適宜改行した。

四、節付は印刷の都合上省略せざるを得なかったが、稀に節付のない写本もあり、また活字翻刻本しか見当らない曲は勿論節付省略本であるから、これらは原典に既に節付がなかった曲である。これらの点は解題で触れた。

五、「次第」「一セイ」「舞」などの演出上の重要記号はできるだけ残したが、囃子の打切を意味する「打切」「切」「ウ」、間拍子を意味する「ヤ」「ヤア」「ヤヲ」「ヤヲハ」、地拍子を意味する「トリ」「片地」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

六、「印は原典に固執せず、詞の所（節付のない所）は「節の所（ゴマ譜のある所）はへを付けて区別した。

七、句点は原則として原本通りにしたが、元来句点は節譜の一種であって（句点は必ずそこで息を一旦切り次を謡えという謡い方の記号）、韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文（節付のある部分）の拍子合わずの所は七五調を基本とする一節を原則として一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句とし、これらの区切の所に編者の見識で句読点を付け

た。この場合原典に句点のあるものはそのままにし、句点のないものは読点を付けて区別した。また詞の所も原本が句点を脱していると推察される場合は、これまた編者の見識で読点を付けた。謡本に読点はない。

八、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられるが、清濁いずれか決し難い場合はそのままにした所もあり、また注意すべき所は括弧でくくって私見を述べた。

九、曲名の下の「」でくくった番号は、未刊謡曲集一の最初の曲を一とし、それからの通し番号である。したがって角淵本番外謡曲からの通し番号は、これに五十二を加えればよいことになる。

十、謡曲の専門的な術語については、『未刊謡曲集』三十一附載の拙稿「謡曲の音楽的研究」を参照して頂きたい。但し右の拙稿には校了後、組版の時に印刷所側に過失があり、二二五頁の初行全部を二二四頁の初行に移行して読んでも頂きたい。

本巻作製にあたってでも大勢の方々の御厚意による所が多いが、中でも故人

では井上嘉介・江崎金次郎・江島伊兵衛・観世左近・高安六郎・横山柚人、
現存の方では、西野春雄・吉田幸一の諸氏、また解題中に述べた各公共機関
の暖い御協力を得た。厚く御礼申し上げる。

（一九九五年八月二十七日記す）

各曲解題

加茂物狂(かもものぐるひ)異本。別名：賀茂(般若窟本『小諷曲舞』に「賀茂」と題して本

曲のサシ・クセを記す)・みなづきばらひ六月祓(家蔵『謡千番外題』に、「賀茂物狂六月祓」とあり、現行曲

「加茂」「水無月祓」とは勿論別曲)。①現行宝生流(謡曲大観・謡曲評釈第三輯・謡曲叢書第

一卷などに翻刻)・金剛流・喜多流は皆前段の省略形。②前段のある古型群で、米

沢本第一種(翻刻底本。外題「加茂物狂」、内題「鴨物狂」)・法政能楽研究所蔵金春流番

外謡本・同蔵上杉本(鴨物狂)・同蔵五百番本・井上本第一種・大聖寺前田家蔵大

聖寺本・觀世流元禄八年版本(謡曲大観第二卷七五八頁所引)・喜多流明治大正年間版

本などがあり、それぞれ小異程度。③喜多流復曲改作本で、前段を短くしたも

の。昭和四十九年(一九七四)四月二十六日、東京の喜多能樂堂で、シテ喜多実、ワキ

森茂好、ワキツレ工藤和哉、間狂言野村万作、笛寺井政数、小鼓筆者、大鼓安

福春雄の配役で演ぜられ、喜多流としては前段復曲本として準現行曲扱いとな

った。この時の台本によつて、第二の異本として翻刻した。外に、鴻山文庫蔵了随本・島原松平文庫蔵本・八戸市立図書館蔵南部本などがあるが、未調。

一五〇五年から一五一四年の間の成立と推定される『自家伝抄』に金春禅竹作、一五二四年四月上旬成立の『能本作者註文』に作者不明とある。佐成謙太郎氏の『謡曲大観』第二巻七五九頁によれば、『徒然草』の影響が見られる。またクセには玉林作の謡物「東国下」が取り入れられている。これらの点から考えると禅竹作の可能性もあるが、あまりにも冗漫な長篇で、もし禅竹とすれば駄作の部に入るべく、作者不明と見る方が無難。

十六世紀初頭乃至中頃(室町末期頃)成立の『舞芸六輪』上卷には「賀茂物くるい。同じ出立(前曲「夏越なごしの祓水無月祓の別名」と同じ扮装の意で、シテ小袖水衣)、脇も前同じ事(ワキは男の意)也」と簡単に記されている。一六〇四年前後の成立らしい鴻山文庫本『曲海』には「賀茂物狂」と題して本曲のサシ・クセが見え、貞享二年(二六八五)版『観世親世小謳当流』中卷(元禄十三年一七〇〇)にも求板本ありに「賀茂物狂」と題して、前シテの上歌「さなきだに行水に……」が、同じく「同(賀茂物狂に同じの意)」

と題して、中入地の「神によるべの水ならば……」が記されているから、近世では前段省略型でない古型が行われていたことがわかる。間狂言は家蔵『鷺流間狂言本』（仮題）に見える。

京落葉（きやうおちば）異本。別名：落葉・落葉（の）宮・小野・小野落葉。「落葉」と題する曲は古くから二つある。通例新しく作られた方が原曲名に形容的語句を加えるのであつて、例えば古曲「鞍馬」に対し、新しく出来た天狗物は「鞍馬天狗」、融通念仏に關係のある曲は「融通鞍馬」と呼ばれる。しかしこの二種の「落葉」に限ってはその前後關係がはっきりせず、二種共「落葉」がファストネームらしく、両者を區別する時に本曲を「京落葉」というセカンドネームで呼び、陀羅尼をとなえる別曲の方を「陀羅尼落葉」というセカンドネームで呼びならわして来たようだ。したがつて古文献で単に「落葉」とあつてその内容がわからない時は、どちらを指すかは不明とせざるを得ないのである。そんなわけで、一五二四年四月上旬成立の『能本作者註文』に世阿弥作とある「落葉」、永禄八年（一五六五）八月十三日『言繼卿記』所載の松尾神社御田植能での八田大夫所

演の「落葉」はどちらを指すかわからない。しかし天文元年（五三三）四月二十九日、『言繼卿記』所載の日吉猿樂勸進能第一日所演の「落葉宮」は本曲と考えられる。一五七八年から一五九四年の間の成立と推定される『いろは作者註文』に見える「た^だらに」は陀羅尼落葉の別名らしいから、落葉は両曲共古曲であり、両曲共詞章も古雅で、源氏物語を上手に消化しているから、両曲のいずれかは世阿弥作の可能性もあろう。両曲共世阿弥作との考えが成り立たないのは、同一作者が内容の異った別曲同士に同じ名をつけることは考え難いからである。しかし両曲の作者が誰にしても、十六世紀初頭以前に互いに同材別曲のあることを知らない者同士がそれぞれに「落葉」と題する源氏物語物を作ったことは間違いないだろう。

本曲は「落葉」「京落葉」と題する版写本がほぼ相半ばする。①は『謡曲評釈』第五輯所収の「落葉」で、元禄八年（二六九五）山本長兵衛版観世流外百番本かそれと同系の版本によったらしく殆ど同文である。（『謡曲叢書第一冊』所収の「落葉」は『陀羅尼落葉』の方で、貞享二年^{一六八六}版二百番外百番本系である）この系統は外に、それぞれ小